

「スター・トレック」☆☆☆

2009（平成21）年9月23日鑑賞＜ホクテンザ2＞

監督・製作：J. J. エイブラムス

ジェームズ・T・カーク（惑星連邦宇宙艦隊・士官候補生）／クリス・パイン

スポック（科学士官、中佐、バルカン人）／ザッカリー・クイント

未来のスポック／レナード・ニモイ

ネロ（ロミュラン人、ナラダの船長）／エリック・バナ

クリストファー・パイク（USSエンタープライズ船長、大佐）／ブルース・グリーンウッド

レナード・“ボーンズ”・マッコイ（USSエンタープライズ医療班ドクター）／カール・アーバン

ウフーラ（USSエンタープライズ通信士）／ゾーイ・サルダナ

モンゴメリー・“スコッティ”・スコット（USSエンタープライズ機関士）／サイモン・ベッグ

スルー（USSエンタープライズ操舵士）／ジョン・チョウ

チェコフ（USSエンタープライズ副操舵士）／アントン・イェルチン

サレック（スポックの父親、バルカン星大使）／ベン・クロス

アマンダ・グレイソン（スポックの母親）／ウィノナ・ライダー

2009年・アメリカ映画・126分

配給／パラマウント ピクチャーズ ジャパン

＜あれから40年＞

テレビドラマ『宇宙大作戦』シリーズが放映されたのは、1966～69年とのことだが、私が深夜のテレビで時々観ていたのは多分その時期ではなく、その後に再放送された時期。そこではっきり覚えているのは、宇宙船エンタープライズのカーク船長よりも耳の尖ったバルカン人のスポック副長（レナード・ニモイ）。また、宇宙の知識を何も持たない私でもわかったのは、光の速度をはるかに超えてワープすることや、人間を瞬時にある地点からある地点へ転送すること。そんな最初のテレビ放映から40年。今や『スター・トレック』シリーズは膨大な量を誇っているらしいが、1974年から弁護士として多忙な時間を過ごしてきた私は、『スターウォーズ』シリーズとも『スター・トレック』シリーズとも縁がなかった。

2009年、装いも新たにJ. J. エイブラムス監督がハリウッドの若手有望株クリス・パインを起用して製作した本作も、私にとっては試写室への優先順位が低かったため見逃していたが、9月のシルバーウィーク最終日の23日、私にとっておなじみの映画館である天六のホクテンザ2で時期遅れで公開された本作を鑑賞。大人気シリーズにもかかわらず、9月23日午後6時からの上映時における観客は何と私1人だけ。どうせ話はややこしく、わかりにくいだろうと思っていたが、意外にも・・・。

＜冒頭のエピソードから伝わる、熱き思いとは？＞

時代を問わず、また洋の東西を問わず男たちの自己犠牲的な行動はさまざまな形で語り継がれているが、本作冒頭に登場するそれは、西暦2233年に惑星連邦の宇宙船USSケルヴィンで発生したジョージ・カーク（クリス・ヘンズワース）のそれ。すなわちクリンゴン帝国領海付近を航行していたUSSケルヴィンは突然出現した謎の巨大宇宙船からの攻撃を受けたから大変。船の指揮権を船長から委ねられたジョージ・カークは総員退去の命令を出した後、一人船内に残り手動操作で敵宇宙船に体あたり。その直前に聞いたのが、脱出艇の中で生まれた男の子の産声だった。妻との別れの言葉は、息子の名前をジェームズ・タイベリアス・カークとすること。

こんな何とも感動的な自己犠牲のエピソードの中で生まれた息子カークの、22年後の姿とは？

＜エンタープライズに乗り込む面々は？＞

本作のキャッチフレーズは「新生『スター・トレック』、未来はここから始まる」。つまり、若き日のカーク船長とスポック副長を登場させ、その対立と友情を示しながら彼等の成長を描くのが本作の狙いだ。アイオワで成長しながら生きる目的を見出せない若者カーク（クリス・パイン）に人生を生きる意味を教えたのは、カークの父ジョージを知っており、今は宇宙艦隊の大佐のクリストファー・パイク（ブルース・グリーンウッド）。さてカークは、パイクからの「キミの父が船長だった時間は、たった12分だった。でも、キミを含む800人の命を救った。キミも宇宙艦隊に入れ。父親を超えてみる」との挑発的な言葉に乗るのだろうか？

他方、バルカン人のサレック（ベン・クロス）を父親に、地球人のアマンダ・グレイソン（ウィノナ・ライダー）を母親に持つため、差別されて生きることを余儀なくされながら優秀な成績で宇宙艦隊アカデミーを卒業し、今は中佐となっているのがスポック（ザッカリー・クイント）。バルカン星からの緊急救難信号が入ったことによって、パイク船長の指揮するUSSエンタープライズも出航することになったが、そこに乗るのはスポックの他、操舵士のスルー（ジョン・チョウ）、副操舵士のチェコフ（アントン・イェルチン）、通信士のウフーラ（ゾーイ・サルダナ）たちの面々。ある問題のために謹慎中だったカークも友人の医療班ドクターのレナード・“ボーンズ”・マッコイ（カール・アーバン）の依頼によってかろうじてエンタープライズに乗り込むことができた。さあこんな状況下から本格的な宇宙冒険ストーリーが展開していくわけだが、カークの父親ジョージ・カークを壊滅させた強力な敵は一体何者？

＜巨大宇宙船ナラダとは？ネロ船長とは？＞

本作に登場する宇宙船USSエンタープライズのイメージは、1966～69年のテレビドラマシリーズにおける宇宙船エンタープライズと同じく実にカッコイイ。他方、一見して悪役とわかるのがロミュラン人のネロ（エリック・バナ）だが、ネロが指揮するナラダの形は私の目には奇怪そのもの。パンフレットを読んではじめてわかったのは、この宇宙船はロミュラン星の掘削船だということだ。したがって、ネロたちの服装も何となく薄汚くてセンスがないうえ、掘削用の宇宙船ナラダがカッコ良くないのはむしろ当然？

そんなことを言うといかにもロミュラン人に対する差別のようだが、ロミュラン人のネロ船長が地球人やバルカン人に対して恨みをもち、復讐を誓っているのは一体なぜ？それが1億5000万ドルの製作費をかけた超大作たる本作の軸となるストーリーだから、しっかりその点の学習を。

＜さまざまな要素とさまざまなキャラが＞

本作には、ザッカリー・クイント演ずる若きスポックとは別に、『スター・トレック』シリーズでスポック俳優として有名になったレナード・ニモイが未来のスポックとして年老いた姿で登場する。また、映画後半からは、スポック「船長」によってエンタープライズから追放されたカークが氷の惑星デルタ・ヴェガで出会うモンゴメリー・“スコッティ”・スコット（サイモン・ベッグ）も登場し、ストーリーに膨らみをもたらしていく。さらに、映画前半は十分そのキャラが明示されなかったレナード、ウフーラ、スルー、チェコフたち若手のエンタープライズ乗組員たちも、スポック船長に代わってカーク船長が指揮をとり始めてからはそれぞれのキャラが発揮されていくから、それに注目！

他方、エンタープライズの紅一点となるクルーが通信士のウフーラ。ウフーラは通信分野ですばらしい能力を発揮するが、意外にもその恋が進展するお相手はカークではなくスポック。なぜウフーラは、人間の感情よりも論理と理性を重視する半分バルカン人であるスポックに恋心を？J. J. エイブラムス監督は「アクション、VFX、エモーション、ロマンス、ユーモア、キャラクター……僕が大好きな要素がすべて詰まっていますっかり魅了されたんだ」と述べているが、確かにスポックとウフーラとの淡いロマンスは本作のすばらしい彩りとなっている。

そんな本作におけるさまざまな要素とさまざまなキャラをタブリと楽しみたい。

＜映像技術と視覚効果の進歩はどこまで？＞

昨日（9月22日）観た崔洋一監督の『カムイ外伝』（09年）におけるVFX技術を駆使した映像にも驚いたが、『スターウォーズ』シリーズと並ぶハリウッド大作『スター・トレック』シリーズ最新作における映像技術と視覚効果の進歩にはそれ以上にビックリ。もっとも、既に動体視力が衰えてきた私はあまりその方面の進歩に興味がないうえ、そのすばらしさにもあまり感動を覚えないから、そこにいくら金をかけても私にとってはネコに小判？ちなみに、パンフレットによれば「オリジナルのTVシリーズは、ボール紙のセットに、ちかちかと明滅する照明を星として、わずかな予算で作られていた」らしいから、まさにここ40年における映像技術の進歩は隔世の感がある。

しかし、『カムイ外伝』の評論で書いたように、難しいのはそのどちらが好きかは人によるもので、カネをかけた最新の映像だからすべての観客がすばらしいと思うわけではないということだ。たしかに大スクリーン上で展開するスピード感豊かな美しい映像も悪くはないが、還暦を迎えた私にはそれに感動する感性は持ち合わせていない。映画が人間に与える感動と映像技術の進歩はどこまで比例するの？そんなことをいろいろ考えていくとその答えが見つからず、ついイライラしてしまうが、そんな俺って少しヘン？

2009（平成21）年9月24日記